

2025 年度 卒業研究

題目

相撲とジェンダー

氏 名 弘中 陽登

学籍番号 1J22E170

指導教員 里見 龍樹

早稲田大学 人間科学部

目次

第1章 はじめに

第2章 先行研究—研究背景と問題提議

第3章 相撲の歴史

3.1 相撲の起源と文化的変容

3.2 近世における制度化と興行化-相撲部屋の構造

3.3 女相撲の位置づけと近代における排除

第4章 相撲部屋フィールドワーク

10/12 相撲部屋見学

10/14 相撲部屋初日

10/15 相撲部屋稽古二日目

10/16 相撲部屋稽古三日目

10/17 相撲部屋稽古四日目

10/18 相撲部屋稽古最終日

第5章 相撲文化の深層と女人禁制—まとめと今後の課題

5.1 研究のまとめと相撲文化の現状

5.2 象徴としての女人禁制

5.3 現代社会との摩擦と変容の可能性

5.4 結論と今後の課題

参考文献

謝辞

第1章 はじめに

大相撲は千年以上続く日本文化の象徴であり、国技として特別な意味も付与されてきた。一方で、女性が土俵に立ち入ることを禁じる「女人禁制」は、ジェンダー平等が強調される現代社会において激しい論争の中心に置かれている。特に舞鶴市での救命措置をめぐる論争や、高市早苗首相が総理杯授与のために土俵に上がるかを問われた一件は、「伝統」と「ジェンダー規範」の対立を象徴的に示すものとなった。

しかし、これらの議論の多くはSNSやマスメディアによる外部からの視点に依存しており、大相撲の内部で生きる力士や親方がどのようにこの慣習を理解し、日々の身体感覚として経験しているのかは十分に語られてこなかった。女人禁制は必ずしも「女性排除」や「差別」という単純な意図に基づくものではなく、長い歴史の中で形成された文化的象徴体系の一部として成立していると考える。一部報道においては「女性力士=正義」「大相撲=悪」といった単純な構図で描かれるものも存在し、こうした決まった物語に沿って意味づけがなされ、相撲本来の価値が損なわれる可能性がある。こうした物語的構造による意味の押しつけは相撲界のみならず、パリオリンピックをはじめスポーツ界に大きく関係しているはずだ。

今回は茨城県龍ヶ崎市の式秀部屋において、6日間のフィールドワークを行った。稽古、食事、睡眠、娯楽を含む共同生活に身を置く中で、現場の声や空気を記録し自身が相撲をどのようなものとして感じるかを具体性を持って記述することを目指す。本研究は、相撲を単なるスポーツやジェンダー論争の対象としてではなく、身体と象徴が結びつきながら意味を成す文化実践として再考する試みである。

第2章

先行研究—研究背景と問題提議

大相撲における女人禁制は、近年しばしば社会的議論の中心に位置づけられてきた。とりわけ2018年、京都府舞鶴市の巡業において倒れた市長に救命処置を施した女性看護師らに対し、行司が「女性は土俵から降りてください」とアナウンスした出来事は、全国的な批判を引き起こした。この頃から、土俵の女人禁制はメディアによって「前近代的で女性差別的な文化」として象徴化されることとなり、またその是非は「伝統か平等か」という二項対立の構図で語られることが多く、相撲界は社会的価値観の変化に対して対応を迫られる形となつた。

しかし、このような議論の多くは相撲界の外部からの視点に基づいており、相撲の内部で生活し稽古を重ねる力士が女人禁制の歴史をどのように捉え、どのような身体感覚として受け止めているのかについては、十分に理解が深められているとは言い難い。女人禁制は、単に女性排除を目的とした制度ではなく、長い歴史の中で形成され、土俵の神聖性や身体性を

含む象徴体系の一部として成立してきた可能性がある。したがって、外部からの価値基準による評価のみでは、この慣習の文化的意味を捉えることはできない。

日本相撲協会は、舞鶴市の件について 2018 年 4 月 28 日に理事長談話を公表し、救命行為を行った女性に対するアナウンスを「大変不適切」と認めた上で謝罪している。談話では、「大相撲は女性を土俵に上げないことを伝統としてきたが、緊急時・非常時は例外である」と述べ、土俵の女人禁制を絶対的な禁止規定として扱っていたわけではないことを示している。また、女人禁制の根拠として三点を挙げている。第一に相撲が神事を起源とすること、第二に大相撲の伝統文化を保持・継承したいという意識、第三に土俵が「男が命をかけて戦う神聖な鍛錬の場」であるという象徴的認識である。特に第三点は、土俵を「男性の闘いの場」とする文化的了解が力士たちの身体感覚にまで浸透していることを示唆している。総じて女人禁制を宗教的な「不浄観」に基づける見解を明確に否定し、伝統文化としての連続性の中にこの慣習を置く姿勢を示している。

さらに談話は、生沼芳弘による観客意識調査を引用し、「女人禁制に反対しない」と答えた観客が 6 割以上、「表彰式で女性が上がれないことに反対しない」と答えた観客が 5 割以上であったことを紹介している。これにより協会は、女人禁制が必ずしも社会的に全面否定されているわけではないとし、制度の見直しには時間と議論が必要であるという立場を示している。一方で、ちびっこ相撲における女子参加制限が説明不足による誤解を招いた点については反省を述べ、運営方法や安全体制の再検討を進める意向を表明している。ここには、相撲界が頑なに変化を拒否しているのではなく変化を受け入れる姿勢を持っていることも読み取れる。

ただし、女人禁制をめぐる論点は相撲界内部の了解だけで完結するものではない。兵庫県宝塚市の巡業で土俵への登壇を拒まれた女性市長・中川智子氏は、次のように述べている。「これまで日本では高野山や富士山など、さまざまな場所で『女人禁制』が解かれきました。伝統は大切だけれど、時代とともに見直されていくもの。相撲が国技とされ、協会が公益財団法人として税の優遇措置を受けているなら、なおさら男女平等が求められると思います」(毎日新聞 2020)。

ここで中川市長が示す論点は二つである。第一に、女人禁制は歴史のなかで変化してきた慣習のひとつであり、相撲においても同様に、時代との関係のなかでそのあり方が問われるという点。第二に、国技である大相撲が公共性を帯びる制度として、現代社会のジェンダー規範と無関係ではいられないこと。実際に土俵への登壇を拒まれた当事者としての語りである点は、相撲における女人禁制が抽象的な制度論にとどまらず、具体的な形で社会に影響を及ぼしていることを示している。

このように、女人禁制の問題は「伝統か平等か」という二項対立では捉えられない。伝統文化としての相撲が有する身体性・象徴性・共同生活の構造、そして現代社会における公共的価値観との摩擦、その両者の間で生じる「揺らぎ」にこそ本質があると考える。本研究は、この複雑な構造を明らかにするために、相撲部屋における参与観察と身体経験に基づく人

類学的アプローチを採用する。

本研究が扱う中心的な問いは以下のとおりである。

「女人禁制は、相撲文化の内部においてどのような象徴的・実践的役割を担い、力士たちの身体感覚や日常実践の中でどのように再生産されているのか。さらに、その文化的秩序は現代社会のジェンダー平等規範といかなる摩擦を生み、いかなる変容の可能性を持ちうるのか。」

これに答えるために本論文では、相撲部屋でのフィールドワークを中心に据え、外部の言説と内部の身体経験を対比しながら、女人禁制という文化的秩序の象徴構造とその揺らぎを記述することを目的とする。

第3章 相撲の歴史

3.1 相撲の起源と文化的変容

相撲の歴史的展開は、(1) 古代の国家儀礼、(2) 中世の武士的鍛錬、(3) 近世の興行化、(4) 近代の制度化、(5) 現代の公益法人化へと段階的に変容してきた。

相撲は日本最古の格闘文化の一つであり、その起源は『古事記』や『日本書紀』に記された国譲り神話にまで遡る。野見宿禰（のみのすくね）と当麻蹶速（たいまのけはや）の勝負は、国家的儀礼としての相撲の始まりとされ、以後、宮中儀式として「相撲節会」が成立了。公益財団法人日本相撲協会が発行する『令和八年 相撲手帳』の大相撲略史年表には相撲の起源を以下のように記している。

皇極天皇元年(642)7月 百濟の使者饗応のため健兒(こんでい)を招集して相撲を取らせる
[日本書紀]。史実における相撲記事のはじめ。

養老3年(719)初めての抜出司(相撲司)をおく[続日本書紀]。相撲儀式制度のはじまり。

神亀3年(726)前年諸国早害のため、聖武天王は、伊勢大廟をはじめ21者に勅使を派遣し、この年豊作により、諸社神前において相撲を奉納する神事相撲記録のはじめ。

天長10年(833)5月任明天皇は「相撲節は」ただ単に娯楽遊戯のためではなく、武力を鍛錬するのが、中心の目的である」と勅命を出し、諸国のすぐれた相撲人を探し求めた。

室町時代(1390-1573) しばしば足利将軍や諸大名が相撲を見物した。

元亀元年(1570)3月 織田信長、常楽寺において相撲を見物[信長公記]。この頃、織田信長、豊臣秀次ら戦国大名が相撲を見物。勧進相撲興行の記録も多く見られるようになる

嘉永7年2月 ペリーの黒船来航、横浜において力士一同米俵を運び怪力を誇示する。

(『令和八年 相撲手帳』)

奈良・平安時代には相撲節会が毎年恒例化し、相撲は国家儀礼・武芸的鍛錬として位置づけられていた。中世には武士の修練の一環として継承され、室町・戦国期には大名による相撲見物や力自慢が盛んに行われた。また嘉永七年（1854）の黒船来航時には、横浜で力士が米俵を運び怪力を示したという記録があり、相撲が一貫して「力」と「身体性」の象徴として社会的に理解されてきたことがうかがえる。

3.2 近世における制度化と興行化

江戸時代には寺社修復の資金を募る目的で行われた勧進相撲が登場し、これが常設興行化していく。新田（2001）は、

寺社や神社の修復費用を集めるために行われた勧進相撲が、やがて恒常的な興行へと変化し、江戸後期には現在の大相撲につながる制度が整えられていった。
と指摘している。江戸の庶民が入場料を払い力士の勝負を観戦するようになったことで、相撲は初めて市が生まれた商業興行として成立した。ここから相撲は、儀礼・武芸・娯楽が重なり合った文化へと変貌した。また、この時期に土俵、部屋制度、番付、行司、締め込み、鬚、吊屋根など現在の制度・様式など、現代の大相撲を構成する基本的様式が整備された。現在の大相撲文化に深く根付く「土俵祭」や「神送り」などの儀礼もこの時期に体系化され、相撲は単なる勝敗競技ではなく、宗教的・象徴的空间としても扱わってきた。内館牧子（2006）は

「土俵は俵で結界された聖域である」
と述べ、土俵が象徴的な意味を帯びた空間であることを強調している。

明治期以降、相撲は近代国家の枠組みの中で再編される。天覧相撲など皇室の後援を受け、相撲は「日本文化の象徴」として国家的保護を得る一方で、東京・大阪相撲会の組織化が進み、年寄制度や部屋制度、行司・呼出の職掌が整備された。さらに大正～昭和初期には、国技館の整備やラジオ中継の開始によって、相撲は全国的なメディア文化へと拡大し、国民的娯楽としての地位を確立した。

現代の大相撲は、公益財団法人日本相撲協会によって運営されており、力士は部屋制度のもとで共同生活を送りながら日常的な稽古を行う。協会は定款で目的を以下のように記している。「相撲文化の振興と国民の心身の向上に寄与することを目的とする。」（日本相撲協会 2022: 1）

他のスポーツとは異なり、力士は共同生活のもとに稽古し、入門後は相撲教習所で礼法・相撲史・医科学、相撲字などを学ぶ。単なるアスリートではなく文化の担い手として育成されるのである。

以上のように相撲は、国家儀礼・宗教儀礼・武士の修練・興行としての娯楽性を折り重ね

ながら発展してきた歴史を持つ。公益法人化は、相撲が単なる興行ではなく、教育的・文化的価値を有する公共的制度として国家から認められていることを意味する。

3.3 女相撲の位置づけと近代における排除

ここでは、相撲文化における女性の位置づけを歴史的に検討する。これまで述べてきたように、大相撲では土俵は「男が命をかけて戦う場」として象徴化され(日本相撲協会 2018)、女人禁制はその象徴秩序の中で正当化されてきた。しかし、歴史を振り返ると、女性が相撲から一貫して排除されてきたわけではないことが明らかとなる。むしろ女相撲は特定の時代において確かに存在しており、今日の女人禁制は、大相撲という制度が近代化の中で形成されていく過程で確立された文化規範として理解すべきである。『令和八年 相撲手帳』の大相撲略史年表には女相撲に関する記述が見当たらないため、ここにあらためて節を設けて整理する。

「女相撲」に関する日本最古の文献は、「日本書紀」に見られ、今日ではこれをもって女相撲の起源とするのが定説となっている。しかし史実として確認できるようになるのには、現在のところ近世にまで下らなければならない。

金田（1993）がこう指摘するように、『日本書紀』には力比べをめぐる記録が散見されるものの、そのほとんどは男性同士の勝負であり、女性による相撲が制度的に位置づけられていたとは言いがたい。したがって、女相撲を古代から連綿と続く制度的伝統とみなすことはできない。一方で、民俗学的研究を参照すると、日本各地の民俗行事において、女性が力比べや相撲に類似した身体的実践を行っていたことが報告されている（田中 1988；赤田 1995）。これらは主に江戸期以前から近代初頭の村落社会に見られ、豊穣祈願や年中行事の一部として行われてきたものである。農村の収穫祭などで女性どうしが組み合い力を比べる場面が記録されていることは、女性が身体競技に参加すること自体が文化的禁忌であったわけではないことを示している。

史料上、女相撲が明確な形で登場するのは江戸中期である。享保期以降、都市の瓦版や興行記録には「女人角力」「娘相撲」などの名称が現れ、都市部を中心に興行として定着した。女性が廻しに類似する衣装を身につけ、土俵上で組み合う興行は、当時の庶民にとって強い視覚的刺激をともなう娯楽として受容された。この段階では、「相撲＝男性」という規範は必ずしも絶対的ではなく、女相撲は男子相撲とは別系統の興行として社会的な位置を占めていたと言える。ここで重要なのは、大相撲と女相撲はもともと別系統であったという点である。大相撲は勧進相撲の系譜を継ぐ神事・武芸中心の制度であり、男性のみが土俵に上がる構造を持っていた。一方、女相撲は都市部を中心とした興行相撲として独自に発展し、娯楽目的で女性が土俵に上がる形で受容されていた。このため、江戸期には男性主体の大相撲と、女性主体の女相撲という二つの系統が並存していたのである。

明治初期にかけては、女相撲一座が各地を巡業し、地方都市や農村を含む広い範囲で興行を行っていたことが確認されている。その後、女相撲が大きな転換点を迎えるのは、明治政府による近代国家形成の過程においてである。文明開化のなかで、政府は芝居や見世物に対する統制を強め、公序良俗の観点から娯楽内容の規制を進めた。その一環として、女相撲は「風紀を乱す裸体興行」とみなされ、行政的に排除されていく（金田 1993: 98）。特に明治6年（1873）の太政官布告以降、各地の警察は女相撲に対して積極的に取締りを行うようになり、女性が褲に近い衣装で取組み合うことが「裸体に等しい」と判断されたことや、男性観客を刺激する壳色的興行であるとみなされたことが、規制の根拠として示された。ここで問題とされたのは宗教的な「穢れ」ではなく、近代国家が形成しようとした性道徳と「良俗」に照らしたときの女相撲の位置づけであった。

明治10～30年代にかけて、興行免許の不許可や巡業の禁止、舞台設備の規制が段階的に進められ、都市部における女相撲興行は次第に姿を消していく。それでもなお、地方では一定の需要が存在し、取締りを回避しつつ活動を続けた一座もあったと報告されている（金田 1993）。代表的な例として、山形県を本拠とする「高玉女相撲」や「石山女大相撲」が挙げられ、昭和初期にはサイパンやテニアン、トラック、パラオ諸島などへの海外巡業も行われたとされる。すなわち、興行としての女相撲は、戦前期には海外公演を行うまでに一定の規模と組織性を持つに至っていた。

しかし、戦後の価値観の転換と娯楽の高度な多様化にともない、女相撲は次第にその存在意義を失っていく。金田（1993）は、歯で重りを支える芸や腹の上で餅をつく芸など、一般人とはかけ離れた身体技法が観客を惹きつけていたと指摘しつつも、女相撲は最終的にサーカス的な見世物へと吸収され、昭和中期以降、興行としてはほとんど姿を消したと述べている。

これと並行して、男子大相撲は明治期以降、皇室の後援を受けながら国技館の建設や協会組織の整備を通じて「国家的文化」として位置づけられていった。東京・大阪相撲会の統合、年寄制度や部屋制度、行司・呼出の職掌の確立といった制度化が進むなかで、大相撲は近代的なスポーツ興行へと再編される。その過程で、土俵は「男が命をかけて戦う神聖な場」として象徴化され（日本相撲協会 2018）、女人禁制は制度的規範として固定されていった。これは古代からの絶対的伝統の単純な継承というよりも、近代大相撲の制度形成のなかで再構築された文化規範として理解する方が妥当である。

他方、現代では女子相撲がアマチュア競技として制度的に確立している。1980年代には女子相撲の全国大会が開始され、1986年には第1回全日本女子相撲選手権大会が開催された。その後、1992年には国際相撲連盟（IFS）が発足し、女子も参加する世界選手権が継続的に開催されている。つまり、「女性が相撲を取ること」自体は現代のスポーツ制度において広く承認されており、女人禁制は大相撲という特定の文化体系に固有の規範であることは、明らかである。

以上のように、女人禁制を古代から連綿と続く絶対的伝統とみなすことはできない。江戸

期には女相撲が興行として存在し、明治期の近代化政策のなかで行政的に排除される一方で、男子大相撲は国家的文化として制度化され、その過程で「土俵は男性の神聖な戦いの場」という象徴秩序が形成されていったのである。

第4章

相撲部屋フィールドワーク

以下のスケジュールの通り、計6日間フィールドワークを行った

- | |
|--------------------------|
| 10/12 稽古見学・顔合わせ・初ちゃんこ |
| 10/14 稽古初日・相撲談議 |
| 10/15 稽古2日目・親方談議・銭湯同行 |
| 10/16 稽古休み・ちゃんこ番・病気・廻し体験 |
| 10/17 稽古3日目・5kg増量達成 |
| 10/18 稽古最終日・掃除をし、帰宅 |

式秀部屋の基本情報

所在地：所在地〒301-0032 茨城県龍ヶ崎市佐貫4-17-17
師匠：式守 秀五郎(四股名：北桜/元幕内) 大量の塩を撒くパフォーマンスで有名
経緯：7月下旬から相撲部屋を訪問するために二子山部屋、伊勢ヶ濱部屋、木瀬部屋にメールを送った。また同時並行で、相撲部屋の研究を行なっている早稲田大学 松山教授にも連絡を取り始めた。最終的に教授の紹介で式秀部屋に訪問することになった。9月場所や11月場所などがある関係で日程はかなり限られた。まずは10/12に教授と一緒に稽古見学に同行することとなり、その際に寝泊まりの交渉を行うこととした。
構成：部屋は親方と女将、9名の力士、行司1名、床山1名から構成されている。

10/12 相撲部屋見学

今回式秀部屋を紹介してくださった松山教授とともに、午前8時30分にJR龍ヶ崎市駅改札前で合流し、午前9時前に式秀部屋へ到着した。門に近づくと、すでに稽古は始まっており、外にまで響く親方の怒声が聞こえてきた。教授は「こんなに声を荒げるのは珍しい」と不安と緊張が混じり合った様子であった。道中、教授は親方について「普段は穏やかで親切な方」と話していたため、目の前で響く叱責の声とのギャップに、二人とも戸惑いを覚え

た。怒号がおさまった頃を見計らい恐る恐る門をくぐると、部屋の中は張りつめた空気が漂っていた。

玄関では行司の木村桜乃助さんが出迎えてくださり、土俵に隣接した一段高い畳敷きの見学席へ案内された。そこから見渡す土俵では、褲姿の力士たちが汗と土にまみれながら激しくぶつかり合っている。写真や動画を記録するためスマートフォンとノートを手に取ったが、まだ正式な挨拶もしていない立場で必死に稽古する力士たちを撮影することに、どこか「隠し撮り」に近い居心地の悪さを感じた。目前で行われる稽古は、テレビで見てきた相撲とはまったく別物に思えた。力士同士がぶつかる衝撃音、荒い呼吸、立ち合いの瞬間に発せられる「セイ！」という声が室内に響き渡り、その臨場感と緊張感は独特だった。圧倒されてしまい、女人禁制やジェンダーの問題を論じることに対して戸惑いと畏れを感じてしまった。「土俵に上がるなんて畏れ多くてできない」というのが、率直な第一印象であった。女人禁制をめぐる議論を進める以前に、そもそもこの場に寝泊まりさせてもらえるのかフィールドワークが実施できるのかという不安も同時に抱いていた。

稽古の途中には、近隣の学校の校長と市役所職員が 30 キロの米袋を差し入れに訪れた。親方や力士たちは丁寧に礼を述べ、米袋は台所へと運び込まれていく。来訪者たちはしばらく稽古を見学し、「稽古頑張ってください」と声をかけて帰っていった。力士たちが地域人々の支援に支えられて生活と稽古が行えていることを実感した瞬間だった。



稽古終了後、親方に松山教授とともにあらためて挨拶を行った。稽古の厳しさとは一転し、とても親切で話しやすい方だった。雑談の中で、私がワンダーフォーゲル部で活動していた

ことを話すと、親方は興味深く耳を傾けた。雪山や沢登りで危険な経験をしたことを語ると、

「相撲もね、物理的に死にはしないけど、死ぬかどうかの瀬戸際まで追い込むんだよ。崖っぷちに立って追い込まれた状況をイメージして必死こいて稽古しなきゃなんだよね。」と語った。家屋の中にある土俵を、断崖絶壁へと例える比喩であったが、稽古を見学した後では、その言葉が不思議と重く感じた。

会話が盛り上がる中で、親方が、「ハルトいいね！やってみるか相撲！な！！身長体重いくつだ？21歳だっけ？」体験的な稽古をさせてもらう程度の意味だと思い、「はい」と返事をしたところ、入門届の書類を封筒一式で渡された。教授が小声で「それを書いたら正式に力士になるという意味だよ」と教えてくれた。危うく、何もわからないまま本当に力士としての人生を始めてしまうところだった。こんな感じで力士なれるの？と困惑したが面白かった。

稽古後には、初めてのちゃんこを振る舞っていただいた。しゃもじは家庭用のものより一回りも二回りも大きく、普段の感覚でよそったつもりでも、実際には大盛りになる。親方から「早食いのセンスがある。もう一杯いけるだろう」と言われ、その勢いのままおかわりをすることになった。運動もしていないのですぐにお腹いっぱいになってしまった。相撲部屋における「食べること」が、単なる栄養補給ではなく、「稽古の一部」であることを、他の力士の食事を見ていて実感した。

この日は午後に帰宅する予定だったので、親方に後日あらためて稽古に参加したい旨をお伝えした。松山教授からは「寝泊りは正直厳しいかもしれません…」と聞かされていたのだが、明後日14日から一泊二日で参加することが決まった。週末には九州場所の準備で忙しいとのことだったのだがご厚意で受け入れてくださった。土産に大相撲カレンダーと番付表を持たせてくれ、帰路についた。

10/14 相撲部屋初日

午前中は私用があったため、昼過ぎに相撲部屋に伺うことにした。電車の移動中、連絡先を交換していた桜乃助さん(行司)からメッセージが来た。

「AM7:40

おはようございます！

親方に伝えました。(改めて、今日から伺うことを連絡していた文脈で。)

今日来るの待ってます。

15日、16日、17日、18日の4日間稽古をしてちゃんこを食べてから帰ったらしいよ！

と親方が言っていました。

弘中くんの予定次第だけど4泊したらいいよ！」

すでに移動中だったため、着替えもコンタクトも1日分しかなかったのだが、こんな機会も2度とないと思い、思い切って急遽4泊することになった。

15時過ぎに式秀部屋へ到着した。桜乃助さんに部屋の中を一通り紹介してもらい、その後の生活や作業については宇瑠寅さんに付きとして教えていただくことになった。稽古はすでに終わっており、夕食は18時頃とのことだったため、それまでの時間は桜乃助さん、薰さんと雑談を交わすことになった。

部屋の構造について

1階



砂まみれになるので部屋が砂っぽくなりがち。家の中に土俵があるので部屋の構造にも様々な工夫がなされていた。

稽古場である土俵から浴室、キッチン/食事場までの動線が考えられた簡潔した構造。稽古で体についた土や砂を部屋に持ち込まないよう、稽古場と風呂場が直結していたり、勝手口から外を通って風呂場に行けるようになっていたりする。そして、体を洗った後は、そのまま1階でちゃんこを食べられる。他の相撲部屋も似たような構造が多い。

2階は皆の寝室(2段ベット)。3階は親方の部屋。

薰さんは静岡県出身の力士で、先天性の難聴により両耳が聞こえない。補聴器を装着して生活しており、これまでにもメディアで取り上げられることがあったという。薰さんは、相撲を始めたきっかけとして、祖父が相撲好きで、幼い頃から家ではテレビやラジオで常に相撲中継が流れていたことを挙げていた。気がつくと自然に回しを締めるようになっていたという。また、式秀部屋を選んだ理由として、親方も片耳が聞こえないという共通点があり、そこに安心感を覚えたと語っていた。相撲を辞めたいと考えたことや、他の進路について深く考えたことはあまりなく、「好きだからやっているので、仕事をしている感覚があまりない」と話していたのが印象的であった。

会話の中では、相撲の年間行事や運営の実態について具体的な説明もあった。大相撲は年に六回の本場所があり、開催地によって土俵に用いられる土の性質が異なるという。名古屋場所では赤土が使われており、擦り傷ができると化膿しやすいため、力士にとって身体管

理の面で特有の難しさがあるとの語りがあった。一方、通常の稽古では、粘土質で乾燥すると固く締まる砂が使われており、安全面に配慮されているという。

また、同時期に行われていた大相撲ロンドン公演についても話題に上った。ロンドン公演では、日本から砂を持ち込むのではなく、現地で選定された粘土質の土が使用され、日本相撲協会の指導のもと、日本から派遣された呼出しと現地スタッフが協力して、伝統的な手法で土俵が設営されたという。海外であっても、土俵という空間が慎重に作られていることを具体的に知る機会となった。

さらに、行司の仕事についても詳しく教えてもらった。行司は土俵上で勝負を裁く役割だけでなく、番付表の作成、取組の編成、稽古札の作成、相撲字を書く作業など、多岐にわたる業務を担っている。特に取組編成は、審判部の親方と4~5人の行司が集まり、囲碁で使われる白い石を用いて、序ノ口から横綱までおよそ600人の力士を配置しながら決めていくという。勝敗や力量、その場所の流れを考慮しながら組み合わせを調整する作業は、強い緊張感を伴うものだと語られていた。

話題は力士の生活や将来設計にも及んだ。薫さんによれば、十両以上になると一人暮らしが認められるが、それ以前の力士は原則として相撲部屋での集団生活を続けることになる。結婚自体は禁止されていないものの、番付が低いうちは経済的な不安定さが大きく、結婚生活を維持するのは容易ではないという。また、相撲部屋を中心とした生活を送るため、出会いの機会自体が少ないと感じている様子もうかがえた。これらの語りから、相撲部屋の制度が力士の競技生活だけでなく、私生活や人生設計にまで大きな影響を及ぼしていることが理解できた。



18時半頃から夕食となった。この日の献立は鶏チリ、辛子蓮根、塩ちゃんこ、サラダ、白米であった。親方は少し遅れて食事に現れ、用意されていた料理のラップが一斉に外されると、場の空気が自然と引き締まったことが印象的だった。

夕食後、風呂を済ませたあと、寝室にて薩摩王さん、阿部さん、桜乃助さんらと雑談を続けた。寝室かつクローズな空間だったこともあり、皆が比較的リラックスした様子であったため今なら卒論研究について話せると思い説明した。

以下語り。

(弘中) 今、ジェンダーと相撲のテーマで卒論を書いています。

ヨーロッパを中心にジェンダー平等や LGBTQ、ジェンダーフリーといった考え方方が強くて、“自分のありたい姿であるべきだ”という価値観が広がっていますよね。

その中で、大相撲は千年の歴史を持つ日本文化の象徴なのに、例えば女性が土俵に立ち入れないなど、独特のルールがあって現代の価値観と噛み合わない部分が確かに存在すると思うんですよ。女性力士でアマチュアプロの今日和選手っていうのがいて、その人は相撲のオリンピック参画を目指していて要はその人は大相撲相撲協会と対立構造になるじゃないですか。すごい簡単に言ってますけど。海外の記事では、ジェンダーに関する記事の文脈の中で女性力士が“正義”、大相撲が“悪”的”のように、単純化されて報じられることも多いと感じています。

(薩摩王さん)なるほどね。でも、オリンピックはアマチュアでしょ、やっぱり。大相撲はプロだから、そこにはやっぱり区別があると思う。

(弘中)じゃ、アマチュア競技としての相撲をやるっていうのは別にいいっていうか。

(阿部さん)アマチュアには一応女子の世界大会・国際大会としてやってていいと思いますし。ただ、今後、女性の総理大臣が誕生した場合、大相撲の表彰式で、総理大臣杯っていうのがあるんで、その時にその女性首相は土俵に上がっていいのか、という問題がありますよね。

(弘中)え、じゃ高市さんが上がるか上がれないか

(阿部さん)そう、喫緊の課題ですよ。うん、疑問されてますよね。

(弘中)それはどっち派の意見が多いんですが、賛成反対で言うと。

(阿部さん)女性の総理大臣がいないから、前例がない。

(弘中)全部、そういう決め事は大相撲相撲協会が決めるんですか？

(阿部さん)最終的には、日本相撲協会が判断することになると思います。

(薩摩王さん)でも総理大臣は総理大臣だからね。個人的には、土俵で渡してほしいなとは思う。でも、伝統だとしたら、女性は上がらないという考え方もある。

(阿部さん)じゃあ逆に、ずっと総理大臣が男性だったのは、なんで女性が選ばれてこなかつたのか、そこも知って見たいと思うんですよね。なんかそこに理由があって誕生していないのかなって。だって、歴史上の武将はみんな男性じゃないですか。だから日本は男性が女性より上ってなっちゃってるのかなって。

(薩摩王さん)うん。確かに女性武将いないもんね。海外しか出ないもんね、そういうの。例えばジャンヌダルクとかそういうのしかいないけど。

(阿部さん)天皇陛下も女性はなれない。

(弘中)力士からしても大相撲の女人禁制は難しい問題なんですか、それとも気にならないですか？

(阿部さん)気にはしないかな。

(薩摩王さん)でも、女性がね丁髷を触ってきたら、ちょっとね、それはちょっとイラつてくる。

(阿部さん)丁髷はね触っちゃいけないもんだから。

(弘中)えー、丁髷ってそういうもんなんですか？

(薩摩王さん)丁髷は商売道具だから。そこはやっぱり触られたくない。

(阿部さん)「自分は入門する前、高校や他の場所でコーチをしていましたし、秋田には女子相撲のクラブもあって、そこで指導もしていました。だから、なんで普通に女性が土俵に上がれないんだろうなっていうのは、思ってたんで。個人的には、(土俵に)上がってもいいんじゃないかなと思っています。」

(弘中)結局、何が問題なんですかね。そもそも土俵に上がることが。

(阿部さん)阿部さん行司だからそういうの詳しいんじゃないですか？なんで女性が土俵に上がっちゃいけないのか？その伝統がずっとこれまで続いてきたのか。

(桜乃助さん) 知らないよ～笑。男社会だからじゃないの？

この後、話の展開は四股名に移ってしまったため語りを得ることはできなかったが力士からその大相撲の女人禁制の理由を得ることはできなかった。また、彼ら自身も曖昧であり疑問に思うことがあるのだという語りは女人禁制の意図を考える上で重要な手掛かりになると考えられる。

10/15 相撲部屋稽古二日目

今日から稽古が始まった。相撲部屋における1日のスケジュールは以下のイメージ。

6:50 起床

7時 ストレッチ&筋トレ(腹筋背筋)

8時 稽古開始 土俵と親方に挨拶

基礎稽古

廻しをつけて土俵入り & ラジオ体操第一・二

* 四股踏み(最も基本的な動作)

* 相撲スクワット(四股の姿勢でスクワット)

* ヒンズープッシュアップ

股割りや伸脚など股関節周りのストレッチ

* 3日間の稽古に取り組んだが、110,120,130回と日を重ねるごとに増えていった。

四股やてっぽうは空いてる時間があれば基本的に自主練を行う。

実践稽古

摺り足

申し合い

三番稽古

ぶつかり稽古

てっぽう

締め

親方の方を向いて四股/股割りを数十回→円になって蹲踞(そんきょ)の姿勢で心得の唱和。

親方からのお言葉

終了 10:30~11頃 土俵を慣らす&掃除

稽古後

11:30頃～ちゃんこ(朝食を食べると厳しい稽古で吐いてしまうので一日2食)

16時まで自由 血糖値が急上昇するので基本昼寝する。

掃除・ちゃんこ番・翌日のメニュー決め等

18時頃 ちゃんこ2回目

～21時 フリー

10/15

6:50 起床 2段ベットの上で寝てる宇瑠寅さんと一緒に一階の相撲部屋に降りる。

7:00 ストレッチ/筋トレ(自主練というか各自バラバラ。7:40 分ごろを目安に廻しを巻いて
7:50 くらいに土俵入り。)

ストレッチの際から呼吸が大事だと教わる。ランニングや登山は吐く息と同じくらい吸う
息も意識しているのだが相撲はとにかく吐くことに意識するらしい。吐くことで自然と息
も吸えると指導いただいた。力士の吐く息が朝の冷たい相撲部屋の中に響き渡っていた。

8:00 稽古開始

初めて廻しをつけた。2人1組で廻しはつけるのが基本で稽古中に廻しを付け直す際も
必ず土俵から降り周りに手伝ってもらってつける。一人で直すのはNGらしい。

稽古中教えてもらったルール

- ・親方にも相手にも背中は見せない
- ・廻しが緩んだら土俵で巻き直さないで必ず降りる
- ・親方からのアドバイスの際は屈んで目線を低くする
- ・親方の目の前を通らない
- ・申し合い稽古の際は勝ち抜きなので相手にアピールするもの

11:00 稽古終了

最初の基礎稽古が一番体への負担が大きかった。また、関節が人一倍硬い自分にとってす
り足や股割りは難しいものであった。足先から指先、目線までいろんな体の箇所に意識を渡
らせてすり足を行うのはとても刺激的だった。毎日やっている力士はスムーズに且つ腰が高
くならないが初心者がやると足を運ぶ際にどうしても少しばかり腰が上がってしまう。腰を
低く腹筋に力を入れて呼吸を意識しながら己に向き合う必要があった。

11時半

シャワーを浴びてちゃんこ。メニューはシャケに厚焼き卵、醤油ちゃんこ、サラダなど



13時

片付けをし、ストレッチをしていると親方に呼び出される。お話を時間をとってくださつたそうだ。改めて卒論の概要について説明をし、舞鶴市的一件や、相撲の本質や精神について語りを得ることができた。

以下語りの引用。

語り①「道」としての相撲

「例えば剣道、剣道はオリンピックないでしょ。なんで世界大会はあるけど、オリンピックはないのかっていうと、そもそも、世界大会にしたくなかったんじゃなかったんじゃない?っていうのは、競技の結果よりも大事なことってあるんだというのが剣道の世界観。それは柔道も一緒で、もちろん相撲も一緒で。」

「でもオリンピックの柔道なんか見ると、勝ちに走ってしまうルール。ただ勝ち、ポイントを取って、勝つことだけにこする柔道っていうのがすごく多いんだよね。勝つ、とにかく勝つことが一番優先になっちゃって、一番大事なところっていうのが損なわれてる。礼がただの礼になっちゃって、やらなきゃいけないからやってる礼っていうか。」

「本当はそこじゃなくて、自分自身の力を出し合って相手も出し合って、『お互いを磨きあげること』っていうのが本来の最終目標なんだよ。剣の究極は『刀を抜かずして勝負を決める』っていう。」

親方は稽古中にも「勝ち負けじゃない。稽古は前に出ること。前に出て力を出し切ること」と繰り返し指導していた。この語りから、相撲は勝敗の結果以上に、礼儀や所作を通して己を鍛え相手と共に高め合う実践であり、その精神性が相撲の核心にあることが見て取れる。単にオリンピックに関して賛否するのではなく根本的に相撲の本質への理解が不可欠である。親方は、相撲を「競技」ではなく「道」として位置づける日本武道との連続性を次のように語った。

「侍の時代って矛盾してんだよね。人を斬って斬って斬りまくって武将はのし上がった。そんな世界の割には、相手を敬って相手を殺すっていうような文化だよね。こんなの日本だけ。剣道、空手道、相撲道、柔道、『道』って字がつくように、“武士道”的精神が繋がってるんじゃないのって。勝てばいい、ルールギリギリで勝てばいいって話じゃない。」

さらに、稽古中の親方の言葉としても、

「勝ち負けじゃない。稽古は前に出ること。前に出て力を出し切ること」

という指導が繰り返されていた。

これらの語りは相撲において、勝敗の結果よりも「礼」や「所作」、そして相手とともに

己を高める関係性を「道」という言葉を用いて表現しており、相撲の本質を垣間見ることができた。

語り②相撲とオリンピック

親方は、相撲のオリンピック競技化について、賛否いずれにも偏らない慎重な姿勢を示した。

「オリンピックになっちゃダメとか、世界大会になっちゃダメとか、やってほしいって言うのもなくて、しちゃダメって言うのもなくて。でもどうあろうと、礼儀とか挨拶の真髄ってあると思わない？」

「ただ、勝つことばかりに重きを入れたら、本当に大事なものがどうなのってなっちゃうから、そこまではオリンピックにしようっていうのは相撲協会も多分思ってないと思う。」

ここで語られているのは、相撲を国際化・競技化すること自体への拒否ではなく、競技化によって失われる可能性のある「礼儀」「所作」「精神性」への危惧である。すなわち親方は、オリンピック化が相撲の文化的な価値を広げるきっかけとなりうる一方で、競技スポーツとしての側面が強く広がることで本来の相撲「道」が損なわれてしまう危険性を指摘している。つまり、この語りからは、相撲界が直面している以下の二重性が浮かび上がるを考える。

- ・国際化・競技化を求める外部からの声
- ・伝統と精神性を守ろうとする内部からの声

親方自身、オリンピック化の是非を単純化せず、変化を受け入れつつも「何を失ってはならないか」を問い合わせ続ける姿勢が印象的だった。

こうした葛藤は、次の章で語られる、アマチュア相撲の国際展開や、元横綱白鵬による競技化の取り組みを通じて、より現実的に理解することができる。

語り③白鵬による相撲の再編構想

親方は、元横綱・白鵬（現・宮城野親方）が掲げる相撲の国際競技化構想について次のように語った。

「白鵬さんが辞めたの知ってるでしょ。辞めて世界グランドスマム構想を掲げてるんだよね。あの方はいずれオリンピックの競技に相撲を入れたいっていうことを発言してる。人が動かないとそういう風にならないし、そういう時代の変化っていうものもあるよね。」

「薰っているだろう？あいつ、ちっちゃい時から相撲やってるんだけど稽古つけてたんだよ。子供教室みたいな。そんときはさ、女の子もいるわけで、なんか並んで一緒にやってるの見

るとさ、よくわからなくなるよね？」

実際に白鵬は引退後、実業団相撲部との合同稽古を実施し、海外出身者から女子部員まで幅広い競技者と交流している。2025年には、成人女性選手と元横綱による史上初の取り組みが実現し、翌年からは国際大会「白鵬杯」に女子の部が創設されるなど、性別を問わない競技参加の場を拡大している。

白鵬は次のようにも述べている。

「（アマチュア相撲の）世界大会が5大陸に広がって、最終的にオリンピックになれば一番いい形。アマチュアが盛り上がって世界に注目されれば、オリンピック種目になれますし、そしてまた大相撲も盛り上がると思います」（トヨタイムズスポーツ、2025）

一方で、相撲の大衆化/国際化が進むほど、「女性は土俵に上がれない」という規範との摩擦がより強く表面化するのではないか。実際、親方自身も女人禁制に対して疑問に感じたことがあったという。

語り④女人禁制をめぐる継承と迷い

「薰っているだろう？あいつ、ちっちゃい時から相撲やってるんだけど稽古つけてたんだよ。子供教室みたいな。そんときはさ、女の子もいるわけで、なんか並んで一緒にやってるの見るとさ、よくわからなくなるよね？」

「女性は血を出すって歴史が関係してんだかわかんないけどさ。だから式秀部屋でもコロナ前はそこの土俵で地域の感謝祭をやってたんだけど毎年。そのときはブルーシート引いて子供あがらせてたよね。もちろん女の子も。」

「ブルーシート引かないで土俵に上がらせてたら協会から怒られちゃうけど。相撲は男の場だから。昔から男が狩をして家を守って、女が子供を身籠るっていう。戦争も男がやっぱり戦ってきたわけじゃん。」

歴史を振り返れば、男が力の象徴として社会的役割を担い、女性が血（生理）を「穢れ」とみなす神道思想も確かに存在してきた。相撲界における女人禁制も、そうした身体観・宗教観を背景に形づくられてきた側面があると考えられる。

しかし、親方の語りは、女人禁制がそのような歴史的説明だけでは単純に語れないことを示している。女の子が男の子と混じって相撲を本気で楽しむ光景を目の当たりにしたとき、親方自身、制度としての女人禁制の根拠は現実の身体経験の前で説得力を失い始めたのだ。

語り⑤伝統と「念」（責任）の重さ

親方は、女人禁制を巡る議論について「立場上、自分の口からは言えない」と述べつつ、その理由を「責任というか『念』」という言葉で表現した。

「これまでの何百年、1000 年の歴史の重み。命懸けで相撲を守ってきた先輩たちの人の重み、国技としての日本文化の重み、こういう『念』があるから変えられないよね、そう簡単に。」

この語りから明らかなのは、相撲界の伝統は単なる過去の慣習ではなく、「命がけで相撲を継承してきた人びとの負債」として現場の人々にのしかかっているという事である。

また親方は、昨今のメディアによる批判に対し次のように語っている。

「メディアで揚げ足取りっていうのかなここ最近の話でしょ？死ぬ気で稽古してきただけなのに。ただ先輩のいうことが絶対だったから昔は。それが受け継がれてきただけであって。」(略)「神様が女性も土俵上がって ok、日本書紀にも載ってるし変えよう！って言ってくれればいいけど。」

伝統を担う者としての苦悩と矛盾が表れた語りであった。女人禁制という伝統が、昨今の社会的情勢を踏まえて簡単には変えることが難しいと理解した上で、容易に「変える／変えない」の判断を下せない領域に置かれているためである。

つまり親方にとって女人禁制は、単なる制度ではなく、先人たちの営みを背負う者としての“責任”的象徴であり、その改変は自らの権限を超える重みを持ってしまっている。だからこそ、親方は「神様」という言葉を引き合いに出し、最終的な決断を絶対的な存在に委ねざるを得ないという語り方を選択したのだと考えられる。

語り⑥相撲界の変化

親方は、相撲界が「伝統を維持しつつ変化してきた」事実について、次のように語った。「昔土俵から首から落ちた力士がいたんだよね。それが原因で死んじゃったんだけど。これまで初めてだったから、誰も想定してないっていう。」

「それから救護師が土俵の近くで常にいるようになって。救護の時も靴は必ず脱ぐとか規定もできて。変わってきてる。」

「舞鶴市の時の一件があってから協会が生命の危機の時には女性も上がっていいってなった。それも初めてのことだったから。あの行司さんは判断に迷ったと思う。結局あの一件で辞めちゃったんだけど苦しくて。一度やった過ちは絶対に起こさないように訓練・対策している。企業と一緒に。」

「歴史を振り返ると土俵も、もともと俵もなかったんだから。白線がなかった時もある。取り組みの制限時間もラジオ放送の都合に合わせて作った。そういう意味でいうと進化してるよね。」

親方の語りにもあったように実際、安全体制の遅れが深刻な問題となった事例もある。

2021年大相撲春場所では、三段目力士・響龍さんが取組中に頭部から土俵に落下し、救護が遅れた結果、急性呼吸不全で死亡した（朝日新聞2021年4月29日）。

当時は土俵周辺に医療関係者が配置されておらず、搬送までに5分以上を要したと報じられている。その後、協会は土俵近くへの医療スタッフ配置を正式に導入し、緊急対応手順の強化を進めている。

さらに親方は次のように述べる。

「大相撲は世界各国から部屋に一人という風に入ってきて、モンゴルの方が強かったりとか、今はウクライナの青錦って今伸びてきてる。これは始まった文化だから。」

つまり、安全対策や女人禁制問題の見直しだけでなく、多国籍化という側面でも相撲は既に大きな変容の最中にある。」

また、元横綱・稀勢の里（二所ノ関親方）が新築した部屋には、敷地内にバスケットボールコートや2面の土俵が設置され、弟子の基礎体力作りや気分転換、地域住民との交流に活用されるなど、従来の部屋の在り方の進化を体現している。

語り⑦総理杯

弘中：「高市さんが総理杯で土俵に上がるかって話を昨日皆で話してたんですけど親方はどう思うんですか？」

親方：「剣を抜かずして勝つっていうか。総理がもちろんあげるんだけど別にそこで揉めるのではなくて、例えば『私は相撲の文化を尊重しておりますので、ここは郷に入ったら郷に従うではないですけど上るのは控え支えていただきます。』って自らの言葉で言って欲しいよね。」

「公務で忙しいから過去の総理も代理のものを寄越すこともあるからさ。」

初の女性首相である高市早苗氏が2025年秋の大相撲九州場所の千秋楽で内閣総理大臣杯を授与する際に土俵に上がるかが社会的な注目の的となっている。政府側は「伝統文化を大切にしたい」という意向を示し、具体的な判断は慎重に検討されるとの発言がなされている。結果的に大相撲九州場所千秋楽（同年11月23日）では、優勝力士に授与される内閣総理大臣杯を、本来の授与者である高市早苗首相に代わり、井上貴博首相補佐官が代理で授与した。高市首相の不在は南アフリカでの国際会議出席のためだったが、そもそも女性が土俵に上ることの可否が事前より議論されていた（朝日新聞2025年11月23日）。

女性が土俵へ上ることを希望して拒否された事例は過去にも存在する。1990年には森山真弓官房長官（当時）、2000年には太田房江大阪府知事（当時）が登壇を求めたが、いず

れも相撲協会に認められなかった（同上）。こうした対応について、相撲協会は「大相撲の伝統文化を継承していくことが使命」と明確に回答している。

すなわち現代においても、土俵の神聖性と性別規範は「変わらない伝統」として強固に主張され続けており、女性首相という新たな状況によって、伝統文化とジェンダー平等の衝突がより鮮明に浮かび上がったと言える。

以上、親方の語りから、相撲界における伝統と変容の相克が浮かび上がった。

ここからは、再び語りを踏まえた上で、実際の稽古場での観察記録へと視点を移す。

16:00

翌日が稽古休みということもあり、夜は自由時間となった。

宇瑠寅さんと自転車で40分ほどの銭湯へ連れて行ってもらった。夕食は近くのラーメン屋で済ませ、帰り道のコンビニではアイスを食べた。

宇瑠寅さんは普段、外出の機会が少ないらしく、ゲーセンのガチャガチャに強い興味を示したり、会計にも慣れていなかった。電子決済のアプリも使っておらず、どこか自分の知ってる36歳とは離れた感覚を抱いた。「先輩の力士」というよりも「友達」に近いような、でも年の差のある、独特の距離感の関係性だと感じた。

銭湯では、宇瑠寅さんが浴衣に丁髷、手には巾着を着用していることもあって脱衣所の段階から力士の存在がすぐに周囲に察知された。湯船に浸かっていても「お相撲さん？」「何部屋？」「体重は？」「階級は？」と次々に声をかけられた。客の一人は、「整髪料の匂いですぐ分かったよ」と話していた。私自身も力士と誤解され、「丁髷していないけど力士なの？」と問われるたびに、「卒論調査です」と答えると、「稽古も一緒に？」「同じもの食べて寝てるの？そんなことができるの？」と驚かれた。自分にとってはすでに慣れつつあった生活だが、外から見れば非常に特殊な状況であることが、銭湯で向けられる周りからの視線から実感した。

また、元ジョッキーの男性と話が弾み、今度競馬場に連れて行ってもらう約束をした。連絡先を交換しようとした際、宇瑠寅さんがSNSをしていないことが分かった。力士は部屋ごとに私生活や情報発信が厳しく制限されており、SNS禁止の場合も多いという。公共の場で一緒に行動することで、力士という職業が職業としての域を超えて日常生活に深く根ざしていることを実感させられた。

21:00 帰宅

黎大丸（レオンマル/れおんさん）と自分の好きなyoutube「伊豆主釣り」を見ながらレオンさんが好きな焼肉屋の話をした。有名店や美味しい部位の話までいろんなこと知ってる。いいいちこソーダをがぶ飲みしていたのが印象的だった。また、小学生の時、富士山を一人で

登らされたらしく 7 時に出発したものの 23 時まで下山にかかったそう。当時で 120kg ほど体重もありめっちゃきつかったそう。親を恨んだしそれ以降山登りしないと心に誓ったそう。

また、今日の稽古について、初日に筋トレから取り組みまで全部力士と同じメニューやってるやついないからびっくりした。親方が途中で止めるかと思った。と言われた。

23:36 就寝

明日はちゃんこ作りに挑戦すると決めた。相撲部屋にきて 2 日目。既に慣れたし皆の優しさに触れ、居心地が良い。

10/16 相撲部屋稽古三日目

この日は稽古休みのため、自由時間だった。力士の中には病院に行くものもいれば野球観戦に行ったり部屋でダラダラしたり、規則正しい生活習慣の元、稽古漬けの毎日を送っている彼らにとって貴重な息抜きである。

7 時半に起床し、個人的にストレッチを行った。

8 時 親方が降りてきたので挨拶をする。九州場所の準備のため終日外出とのことだった。用途を分けているため、車を 4 台所有しているそう。九州場所まで車で行くため、車の点検に行くと話していた。

短い時間ながら、足首のストレッチ方法を教えていただいた。親方になるにあたって体のことの一から勉強したらしく、詳しい。部屋のあちこちに体に関するスクラップや情報？が貼ってあったり人体模型があったりするのはそういう訳か。運動をするため筋肉が固まりやすくなっているからとアドバイスを受けた。

9 時半から初めてのちゃんこを作る。

この日のちゃんこ担当は宇瑠寅さんと富蘭志壽さん、潮来桜さん(ちゃんこ長。ちゃんこやキッチン周りの管理統括を行う)、阿部さん。

メニューはホルモンカレー、野菜スープにサラダだった。僕はサラダと野菜スープを任してもらった。スープの隠し味は濃口醤油。コクが出るし味にまとまりが出るのだ。



一度の食事で卵を4つも食べたのは初めて。ちなみにこの後二回お代わりしたため計7個。



本格的な包丁研ぎに挑戦。キッチンには包丁が数多く並んでいて、時々手入れを行うらしい。

昼食後、薩摩桜さんと買い出しのついでに散歩をした。

歩きながら、彼の体調や家族の話を聞くことができた。

〈語り〉 身体を削る相撲と病

彼の両親は「あと一年しか応援しない。その後は自分の好きにしなさい」と言っているそうだ。実は薩摩桜さんは、今年の4月ごろまで肺炎で半年ほど入院していたという。最初は昨年の初場所で胸に痛みを感じ、病院では筋膜炎と診断されたが、その後、呼吸が苦しく三日間眠れない日々が続いた。再度の精密検査でようやく肺炎と分かり、しかも肺の3分の1が

機能していない状態だった。そのため肺活量が極端に少なく、日常生活にも支障が出ているという。稽古中も呼吸が浅く、しんどそうにしている姿が印象的だった。一方でこうした背景にも関わらず言い訳せずに毎日取り組みを行っていた。さらに、彼は毎日インスリン注射を打ち、痛み止めの注射も併用している。医者からは「あと2年以内に痩せなさい」と言われているそうだ。やはり明らかに健康上の問題があるのだと思う。それでも、相撲を続けるためには体重を維持しなければならない。力士の生活には「生きているだけで命を削っている」と感じるほどの過酷さがある。これまで力士の体を“強さ”的象徴として見ていたが、実際はその体を保つこと自体が大きな負担であることを知った。彼らが命を懸けて稽古に取り組む理由が、少しだけわかった気がした。因みにこの話は部屋の人にも詳しくはしたことがないらしく、どうしてそんな話を自分にしてくれたのかわからない。話を聞いている時もただ相槌を打つことしかできなかった。自分の命をかけて毎日稽古に挑んでいるという事実が、私の心にとても重くのしかかってきた。自分が外部のものだからこそ、普段は周りに言えない、心の中に積もった黒いモジヤモジヤを吐き出したのかもしれない。親方にも話さなかつた薩摩王さんの葛藤に触れ、ただひたすらに、静かに、心から熱く応援したいと思った瞬間だった。



↑

夕飯の唐揚げを仕込んでいる様子。1日でこの量が消えるのだから驚きた。もちろん味は一品もの。

こちらは甘酒。本物の米麹で作られたものを冷凍したもの。行事などでまとめて頂くことがあるので冷凍庫には常にあるらしい。甘さが控えめで非常に美味しかった。

↓



19時ごろ

廻しの体験をさせてくれた。数年に1度しか交換しない力士もいるため、大変貴重な経験だった。



↑

通常。何年もの間使うため色褪せ、生地も柔らかくなる。洗濯は師匠が亡くなった時にするらしい。そのため毎日天日干しを行う。



←こちらが新品を卸したもの。四つ折りにして使う。

20時半 親方帰宅後話をする。

親方は、次のように語った。

「やっぱ俺は大事なことって、挨拶だと思うのよ。礼儀っていうか。

相手にするものだけじゃない。日本の文化として美しいとは思うんだけど、

同時に自分の遺伝子や細胞に挨拶して覚悟を決めることだと思う。」

挨拶とは、相手への礼儀にとどまらず、

自らの身体に“今日を生きる覚悟”を言い聞かせる行為だという。

「相手に伝わる挨拶をするということは、それだけで

今日一日頑張りますよって自分に決意してるってことなんだよ。

よし頑張るぞって細胞に言い聞かせる。そうすると挨拶も変わってくる。」

さらに親方は、挨拶を日本文化の核心として位置づける。

「挨拶っていうのはさ、日本文化の“奥義”なんじゃないかっていうぐらい、大事なことなんじゃないかな。」

その例として、武道家の知人の言葉を引く。

「競技をする場所っていうのは精神を磨く道場なのに、なんでツバを吐くんだ、って元侍ジャパン監督・小久保選手が師事した空手の先生が言ってた。アメリカの選手にはない感覚かもしれないけど、日本にはそういう意識があるだろ？ゴミを拾ったりするのもそう。」

「『おはようございます』『ありがとうございました』『お世話になりました』

こういう人間になりなさいって言ってるの。

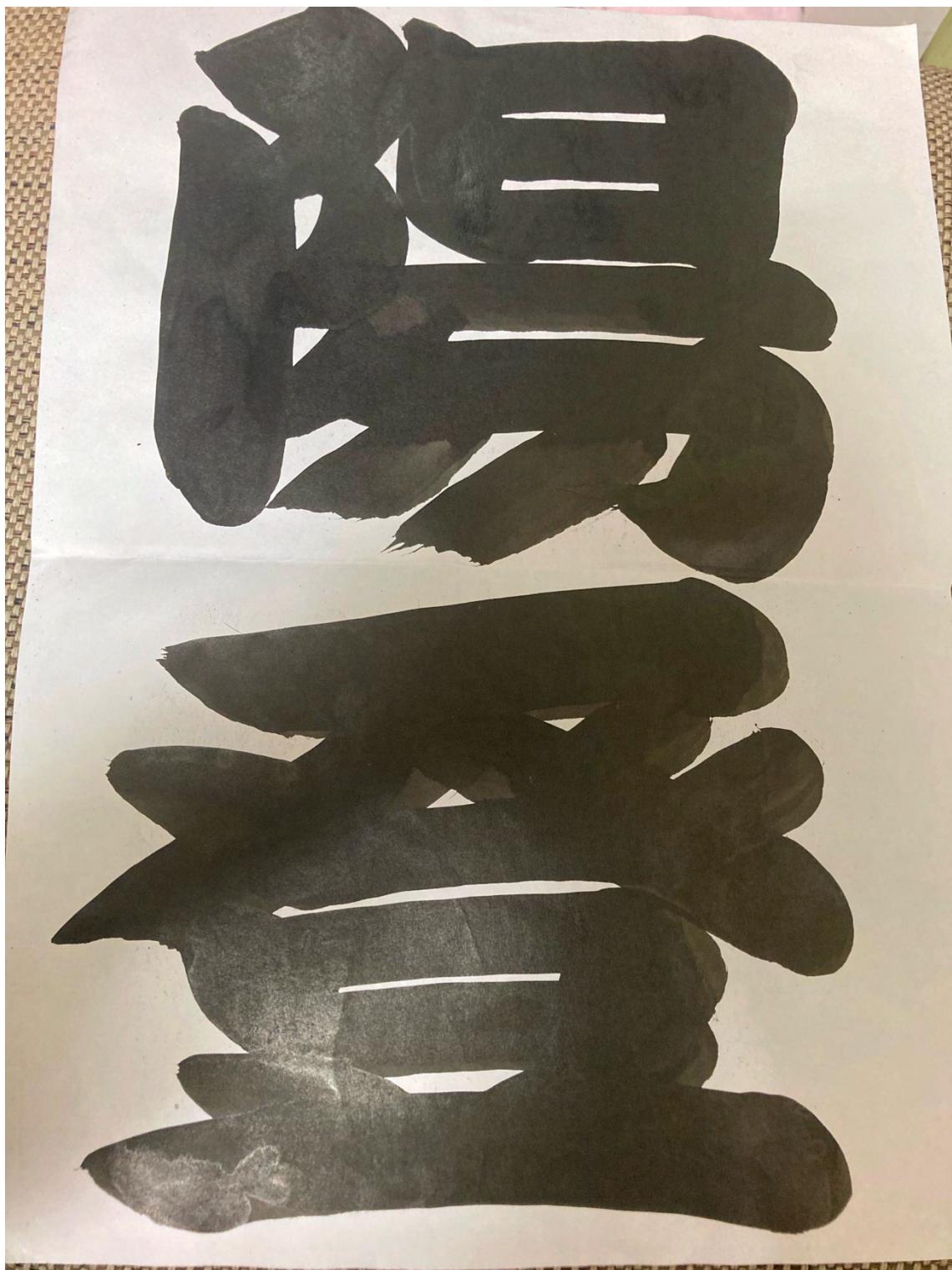
強くなればいいんじゃない。

人として、こういう人間になれって。それが成長ですよ。」

親方にとって相撲は、勝敗を競う競技以前に、礼節が大事であるそうだ。親方として人間を育てる上で、挨拶を人間形成の基礎として位置付けているのである。

22時前に就寝。

桜ノ助さんが相撲字という書体で「陽登」の文字を書いてくれた。



親方が「陽昇龍」という四股名を与えてくれた。

名前の由来である太陽から龍のようにグングン登っていく(成長していく)という意味を込めてくれた。これもフィールドワークならではの貴重な経験であった。

10/17 相撲部屋稽古四日目

6:50 起床

7:00 ストレッチ・筋トレ

今朝は特に股関節周りの柔軟運動に力を入れた。たった数日だけでも可動域が広がっている感覚がある

8:00 稽古開始

今日の稽古は九州場所前だということもあり、申し合い稽古と三番稽古に重点を置く。

稽古中、レオンさんに「脇締めて、脚→手→額の順で一瞬でぶつかれ。」とアドバイスをもらう。相手の脇の下に刺すようにして体を入れるのが難しい。どうしても上体が起き上がりそうになってしまう。

11:00 稽古終了・土俵掃除

稽古後は土俵を慣らし、箒で丁寧に掃除を行う。

11:30 ちゃんこ

今日の献立は塊肉を煮込んだビーフシチュー/味噌ちゃんこ



目標だった 68kg に到達。初日から毎日 1kg 増量し、計 5kg の增量に成功した。

ちゃんこは気絶しそうになるほど食べ、食後に手を後ろについたら親方に「隙を見せるな！」と注意される。食事も稽古の一環なので隙を見せてはならないらしい。背中を見せてはならないのと同様、食事中も目の前の食事と向き合う必要がある。

13:00 自由時間・昼寝

力士は昼寝する。

16:00 掃除、ちゃんこ作り

18:00 夕食 メニューは昼の残りと照り焼きチキン、サラダ。牛肉の上に鶏肉が乗っている



21:00 就寝

寝室に戻り、翌日の稽古に備えて早めに就寝。4日間の稽古を経てだんだんすり足や四股も上達してきた。

また、目標だった68kgに到達。初日から毎日1kg増量し、計5kgの増量に成功した。明日が最後の稽古となってしまった。あっという間の4日間だったが、全てが刺激的だった。

10/18 相撲部屋稽古最終日

6:50 起床

7:00 ストレッチ・筋トレ

7:50 稽古開始 九州場所前、部屋での最後の稽古のため取り組みの数も多い。

11:30 稽古終了・土俵掃除 いつも通り唱和をして稽古終了。親方からはこれから九州に移動するまで稽古休みが続くから体調を崩さないよう、健康管理に関する注意の徹底がなされていた。

12:00 ちゃんこ

13:00 部屋の片付け/掃除をして帰宅。またいつでも稽古しに来いと、最後まで暖かく見送っていただいた。

考察

数日間のフィールドワークを通じて、相撲は単なるスポーツではなく、日常の稽古、精神統一、礼儀、身体感覚が一体となった文化であることを実感した。土俵や稽古場には、力士や親方によって大切に守られる独自の秩序が存在し、これが日々の稽古や儀礼を通じて再生産されていることがわかる。その多くが、相手や親方へのリスペクト、土俵の神聖性、己を追い込み己に打ち勝つという闘争性と深く結びついている。単に力を競うのではなく、稽古を通して自分自身を極限まで追い込み、精神と身体を鍛える過程こそが相撲の核心である。

親方は相撲を「男が裸で何も武器も持たず、ぶつかり合って目をギラギラさせ、アドレナリン全開で間合いを計り、全てをぶつけ合う競技」と表現していた。体格や体重を超えて精神や技の鍛錬を重視する文化的価値が、ここには表れている。実際に稽古に参加し土俵に上がることで、日々の食事・稽古・睡眠の積み重ねが生活そのものであり、命をかけて身体を削る行為そのものが相撲であることを肌で感じた。ここでは勝敗よりも、己との戦いと礼儀の尊重、身体と精神の鍛錬が重視される。

また、土俵や稽古場における秩序は単なる掟ではなく、力士の身体感覚や日常生活に深く刻み込まれている。土俵に上がる前の挨拶、立ち振る舞い、親方への礼、稽古中の目線や間合い、呼吸や手足の動きまで、すべてが文化の一部として意味を持つ。この秩序や礼儀へのリスペクトなしに、外部の価値観や国際化、多様化の名のもとに掟を変えることは危険である。相撲の文化的価値は、勝ち負けや性別だけで測れるものではない。

次章では、このフィールドワークで得た文化的理解を踏まえ、相撲の歴史や制度、ジェンダーの問題についてさらに考察する。

第5章

相撲文化の深層と女人禁制—まとめと今後の課題

5.1 研究のまとめと相撲文化の現状

第3章では相撲の起源や歴史的背景を整理した。女人禁制の成立過程は単に古い伝統に根ざすものではなく、時代ごとの社会的・宗教的要因の中で形成された歴史的産物である。これにより、相撲界における制度や慣習も固定的なものではなく、変化の可能性を内包していることが示される。女相撲と大相撲は系譜的に異なる存在であり、この背景も相撲協会が女人禁制を維持する理由の一つである。一方で、IFS (International Sumo Federation) の発足やラジオ放送に合わせた制限時間の導入、ルール改変など、相撲界は外部環境や社会的要請に応じて柔軟に変化してきた歴史もある。

現行ルールでは、力士が勝利時に手刀（てがたな）を切ることが義務付けられている。この儀式は、勝利への感謝を表す神事の名残であり、五穀豊穣の守り神である造化三神に敬意を捧げる行為である。土俵上でのこのような象徴的行為は、相撲が単なるスポーツではなく、神聖性を持った文化的実践であることを示している。

第4章で明らかになったのは、力士の日常生活や厳しい鍛錬を通じて、相撲の本質が身体的に理解され、共同体の規範として自然に再生産されていることである。外部の議論では女人禁制は「差別」や「不平等」の象徴として論じられることが多いが、この認識はスポーツとしての側面に偏った理解である。現代においても、事件が発生するたびに救護係が配置されるなど安全対策は進んでおり、相撲界は変化と伝統の間で絶えず調整を行っている。

5.2 象徴としての女人禁制

女人禁制は単純に賛否を決められる問題ではない。土俵が「男性の闘いの場」として歴史的に象徴化されていることを踏まえると、力士の日常生活や文化意識はこの象徴秩序に囲まれている。力士は稽古や食事、睡眠、娯楽を通じて、土俵の神聖性や厳しさを身体的に理解し、それを共同体の規範として内面化している。例えば、早朝の稽古での取り組みや、勝敗に伴う神事的行為、懸賞金授与時の礼儀作法など、日常的な行動の一つひとつが土俵の象徴性と結びつき、力士の身体感覚や行動規範に深く根付いている。

江戸時代の興行相撲とは異なり、現代大相撲では土俵が単なる娯楽の場ではなく、神聖性や伝統を体現する場として位置付けられている。芸道として発展した側面もあり、女人禁制はその象徴秩序を保持する手段の一つとして機能してきた。つまり、女人禁制は単なる制度的規則ではなく、力士の日常や身体体験の中で自然に理解・再生産される文化的要素として捉えることが可能である。

5.3 現代社会との摩擦と変容の可能性

現代社会ではジェンダー平等の価値観との間で摩擦が生じることがある。救命措置の事例や女性市長の土俵登壇拒否はその象徴である。しかし、相撲協会や力士の対応を観察すると、伝統を守りながらも状況に応じた柔軟な判断が存在することが分かる。例えば、救急対応や安全確保のための例外措置は、歴史的伝統と現実的要請の調整を示している。

このように、女人禁制は固定的なルールではなく、歴史的・象徴的・社会的文脈の交錯の中で理解されるべきである。単に「女性が土俵に上がれないのはおかしい」と主張するだけでは、相撲文化の複合的な意味を見落とすことになる。相撲界に何を求めるのか、どのような変化が望ましいのか、また変化によって失われる文化的・象徴的価値は何か、といった視点を総合的に考察することが必要である。

一方で、親方や力士の語りからは、相撲界が変化に対して葛藤を抱えている様子も垣間見える。オリンピックにおける柔道の例が示すように、国際的な舞台で文化や価値観が損なわれることは、相撲の本質理解に影響を与える。したがって、変化のあり方については慎重かつ多角的な議論が求められる。

5.4 結論と今後の課題

本研究は、女人禁制を単なる「差別」や「古い伝統」として捉えるだけでは、相撲文化の深層を理解することはできないことを示した。力士の日常生活や身体体験を通じて形成される規範意識、土俵の象徴性、社会との摩擦、変容の可能性、これらを総合的に理解することで、相撲文化を多層的に捉えることが可能となる。

こうした議論は、単なる賛否論争にとどまらず、相撲文化の深層を捉えるための有効な入り口となる。さらに、相撲界やスポーツ界における変革を正しい方向に進める際の参考にもなる。今後の議論では、伝統的象徴の保守と現代社会の価値観との調整がどのように行われているのか、具体的な事例の分析を進めることが重要である。特に、今回の研究のように相撲部屋での参与観察に加え、アマチュア相撲や国際的相撲団体の事例分析を行うことで、より多角的で実践的な理解が可能になると考えられる。

参考文献

- 赤田光男（1995）『女人相撲の民俗』吉川弘文館。
- 金田英子（平成4年11月9日受付、平成5年1月11日受理）「興行としての女相撲に関する研究」。
- 内館牧子（2006）『女はなぜ土俵にあがれないのか』幻冬舎新書。
- 新田一郎（2001）『相撲の歴史』講談社学術文庫。
- 田中宣一（1988）『相撲の民俗』未来社。
- 日本相撲協会（2018）「理事長談話（舞鶴市巡業における不適切なアナウンスについて）」日

本相撲協会.

日本相撲協会 (2021)「大相撲の継承発展を考える有識者会議 提言書」公益財団法人日本相撲協会.

日本相撲協会 (2024)『令和八年 相撲手帳』公益財団法人日本相撲協会.

公益財団法人日本相撲協会 定款 <https://sumo.or.jp/pdf/kyokai/zaimu/teikan220328.pdf> (2025年12月26日閲覧).

nippon.com 編集部 (2021)「女はなぜ土俵に上がれないのか——“聖域”の論理」nippon.com <https://www.nippon.com/ja/news/100092/> (2025年12月26日閲覧).

毎日新聞 (2020)「女人禁制は“伝統”か 問われる相撲界の姿勢」<https://mainichi.jp/articles/20200308/k00/00m/040/223000c> (2025年12月26日閲覧).

白鵬がアマ相撲でガチンコ勝負！えっ女性と!?これは必見！(2025年10月1日)
https://toyotatimes.jp/toyotatimes_live/373.html (2025年12月26日閲覧).

朝日新聞「高市首相は土俵に上がらず、代理が総理大臣杯授与 大相撲九州場所」朝日新聞デジタル <https://www.asahi.com/articles/ASTCR2DMBTRUTQP017M.html> (2025年11月23日閲覧).

朝日新聞「三段目力士・響龍さん死亡 土俵周辺には医療関係者不在」朝日新聞デジタル https://www.asahi.com/articles/ASP4Y6DRFP4YUTQP011.html?iref=pc_extlink8 (2025年12月8日閲覧).

謝辞

当卒業論文を執筆するにあたり、多くの方々にご指導とご協力をいただきました。

まず、相撲部屋でのフィールドワークを快く受け入れてくださった親方および力士の皆様に心より感謝申し上げます。日々の生活や稽古を通じて、相撲を身をもって学ぶ貴重な機会をいただきました。深く感謝の意を表します。また、今回相撲部屋をご紹介いただくにあたり、松山教授、里見教授にもご協力いただきました。厚く御礼申し上げます。

追記：1月の初場所の席を、とあるご縁により頂くことができました。両国国技館にて再び皆様にお会いできる日を楽しみにしております。